HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アメリカにおける商業的家族農場の費用と収益
Author(s)	和泉, 庫四郎
Citation	季刊農業経営研究, 4, 86-91
Issue Date	1958-05-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36263
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_86-91.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アメリカにおける商業的家族農場の費用と収益

Farm Costs and Returns.1953, (with Comparisons
Agriculture Informatiou Bulletin No.128

和泉庫四郎

～抄　訳～

一　1953年における経営成果

この報告は合衆国の主要な生産地域における商業的家族経営農場（Commercial family～operated farm）の中から幾つかの重要な類型（type）を撰んで，1953年と，それ以前の費用と収益を示したものである。

極く最近，公にされた「農業所得事情」（The Farn Incom Situation）によれば，1953年にこの国の全農業経営主の獲得した純所得は，前年に比べて5％少なく，購買力は1941年と略々同じであつた。全農業経営主の純所得の総計は1952年のそれを15％下廻つていた。

この報告で示される資料はかなり小面積で，かつ同じような地域内の特定類型の平均的商業的家族経営農場に特に当て嵌まる。従つて，これらの資料は商業的家族経営農場でない小規模乃至は大規模農場の経営又は収益を示さないし，栽培諸条件や費用及び収益に影響を与える諸要因の異なる地域では仮令同一類型の農場であつても，必ずしも当て嵌まらない。

本報告で検討する農場諸類型の位置は最初に掲げた地図の如くであり，土地，労働及び資本の量は次表に示す如くである。

類型別にみた商業的家族経営農場の規模及び農業所得事情（1953年）

農場類型と位置	農用地面積	農業投下資本額	農業投下労働量 合計	農業投下労働量 中雇傭労働	農業現金収支 粗収入(1)	農業現金収支 支出(2)	農業現金収支 純収入(1)－(2)	経営主及び家族労働力所得 総額	経営主及び家族労働力所得 1時間当り
	エーカー	ドル	時間	時間	ドル	ドル	ドル	ドル	ドル
酪農場									
中央東北部酪農	197	28,400	4,610	1,000	8,134	5,960	2,174	1,781	0.49
東部ウイスコンシン酪農	125	33,900	4,530	720	7,141	4,544	2,597	2,238	0.59
西部ウイスコンシン酪農	141	22,630	4,020	400	5,714	3,656	2,058	2,014	0.56
玉蜀黍地帯農場									
豚～酪農	161	42,890	4,430	710	11,129	5,999	5,130	3,756	1.01
豚～肉牛育成	214	36,250	3,520	390	6,921	3,666	3,255	1,486	0.47
豚～肉牛肥育	197	61,330	4,230	630	20,490	11,222	9,768	3,916	1.09
換金穀作	226	88,150	3,310	460	13,423	6,559	6,864	3,465	1.22
煙草～家畜農場									
ケンタツキーブリユーグラス	113	24,510	3,960	1,190	5,282	2,679	2,603	2,201	0.79
棉作農場									
南部ピーモンド棉作	162	14,290	3,650	970	2,524	1,945	574	459	0.17

農業類型と位置	農用地面積	農業投下資本額	農業労働投下量 合計	農業労働投下量 雇傭労働	農業現金収支 粗収入(1)	農業現金収支 支出(2)	農業現金収支 純収入(1)−(2)	経営主及び家族労働力所得 総額	経営主及び家族労働力所得 1時間当り
ミシシッピイ・デルタ棉作	45	11,750	3,460	640	3,135	675	2,460	2,331	0.83
テキサス黒土草原棉作	167	26,960	5,440	2,860	7,331	4,458	2,873	2,174	0.84
テキサス高原棉作（非灌漑）	338	35,110	2,320	490	2,859	3,512	−653	−1,902	−1.04
テキサス高原棉作（灌漑）	305	80,070	7,260	5,020	22,493	12,842	9,651	6,609	2.95
春小麦農場（大平原は含まず）									
小麦～小穀粒～家畜	671	42,320	3,260	640	7,593	5,163	2,430	1,557	0.59
小麦～玉蜀黍～家畜	474	42,890	3,900	480	6,133	4,804	1,329	1,476	0.43
冬小麦農場									
小麦～豌豆（ワシントン及びアイダホ）	512	135,350	3,190	1,180	21,131	9,971	11,160	6,875	3.42
緬羊牧場									
北部大平原	6,152	89,070	8,250	3,930	17,408	11,698	5,710	−179	−0.4
肉牛牧場									
北部大平原	4,010	74,400	4,450	1,050	8,854	5,546	3,312	−618	−0.18
内陸山地	1,690	74,760	4,880	860	8,797	5,273	3,524	959	0.24

1953年の農業純所得（註）は本報告考察対象である19類型のうち16類型において1952年のそれを下廻り，黒土草原棉作農場とタイプを異にする2つの春小麦農場の3類型において上廻つた。南西部は1953年に烈しい旱魃に襲われたので，テキサスの高原地域に於ける非灌漑棉作農場では平均農業純所得は1937年以降の最底（−25ドル）であつたが，それでもその地帯の農業純所得はテキサス黒土草原地域の棉作農場のなかで最も大きかつた。春小麦～小穀粒～家畜農場の農業純所得は極くわずかに増加しただけであつたが，春小麦～玉蜀黍～家畜農場では1953年の収量は1952年のそれを上廻つたので，純所得は著しく増加した。

（註） 農業純所得（nat farm income）は家計仕向自給農産物価額と農場用住居（farm dwelling）の家賃相当額を含んでいるが資産の物理的変化が差引かれている。それは「農業所得事情」で使用される経営主総純所得（Operators total net income）と云う用語と比較すべき内容を有する。

経営主とその家族が労働及び管理に対して受けとる収益（註）は春小麦農場と黒土草原棉作農場では1952年より1953年の方が多かつたが，それ以外の農場では少なかつた。テキサス高原の非灌漑棉作農場と北部大平原の牛及び緬羊放牧農場においては農業純所得から農業資本利子を差引くと，経営主と家族の労働に対して何らの収益も残らなかつた。1953年における労働収益の購買力はあらゆる農場において1947～49年平均を下廻り，又1937～41年と比較出来る農場18類型中5類型において当時の水準を下廻つた。

（註） 経営主と家族が労働及び管理に対して受取る収益とは農業純所得から支配的な利子率で算定する農業資本利子を差引いたものである。農業者が彼の農場をどの程度所有しているかによつて労働及び管理に対する収益に加うるに，この利子の一部又は全てを所得として利用できるようになるのである。

経営主とその家族が労働及び管理に対して受けとつた一時間当りの収益はテキサス高原における非灌漑棉作農場を最少（−1.04ドル）とし，ワシントン及びアイダホの小麦～豌豆農場の3.42ドルが最大であつた。テキサス原高の非灌漑棉作農場とは逆に同一地域の

灌漑棉作農場では2.95ドルでワシントン及びアイダホの小麦～豌豆農場に次いで大であつた。

1953年の農業純生産(Net farm Production)を1952年のそれに比べると19類型中11類型において多く，8類型において少なかつた。又1947～49年のそれと比較すると15類型において多く，1937～41年に比べると18類型の中16類型において多かつた。1937～41年の資料はテキサス高原の灌漑棉作農場に対しては用いることが出来ない。

農業純生産の年々の変化は専ら雨量と密接な関係にある作物収量と牧草地の条件（Pasture conditions）に依存する。1953年の農業純所得が1952年を下廻つた8農場類型は1類型を除くと作物収量も減退していた。ウイスコンシンの酪農々場と小麦～豌豆農場では，1953年の作物収量は1952年のそれを下廻つたにもかかわらず農業純生産が増加したが，それは前者においては，部分的には，今迄以上の飼料が家畜及び畜産物に変えられたためであり，後者においては実収耕地面積(harvested Cropland)の増加と豌豆（この作物は小麦以上の価値をもつ）の作付面積の増加に拠るものであつた。作物収量は短期的には雨量によつて大きく左右されるが，永年の動きをみると雨量以外の諸原因によつて変化しているようである。すなわち，雑種の育成を含む品種改良，肥料及び苗床の適切な準備が収量の増加に著しく貢献した。1953年のエーカー当りの作物収量を1947～49年のそれに比べると19類型中12類型において多く，1937～41年のそれとでは，資料が利用出来る18類型中17類型において高かつた。

農業純収益を決定する主要々因は販売される農産物の受取価格と生産に使用される諸物品及び諸用役の支払価格である。1953年の販売生産物の受取価格を1952年に比較すると本書に挙げたあらゆる農場で下落したがその下落は牛放牧農場における32%が最大で，豚～酪農農場の1%が最小であつた。これらの農場類型の主要販売生産物の中で下落が著しかつたものを抽出して順位づけるならば，牛，仔羊，棉，玉蜀黍，乳脂，牛乳，大豆の順であつた。これに対して価格の上昇は豚が最大であり，ついで鶏，煙草，小麦の順であつた。

1953年における農業者の受取価格は1952年のそれに比べると19の農場類型のうち，15類型において下落したが，その下落の度合は牛牧畜農場において最も著しかつた。1947年以降の価格変動は緬羊牧畜農場において最も著しく，1951年には1947～49年の170%でつたが，1953年には90%に下落した。これに対して最も少なかつたのは煙草農場であつた。

全国を通じて，機械類，施設，モーター資材，建物及び柵用材料，肥料，殺虫剤の如き大部分の工業製品の1953年における価格は1952年のそれを上廻り，賃金や税金も上昇した。又飼料や肥育用の家畜及び交替用の家畜（replacem-ent livestaek)に対する支払価格も可成り下落した。

1953年における諸物品及び諸用役の支払価格の平均を農場類型別にみると，4類型において1952年のそれを上廻り，11類型において低く，4類型において同一であつた。以上の支払価格を1947～49年のそれに比べると，豚～肉牛肥育農場が102%で最も低く，内陸部山地肉牛牧場が128%で最高であつた。豚～肉牛肥育農場では，肥育用牛に対する支払価格が下落したので，他の品目に支払われた高価格を相殺したのである。

1953年における生生単位当りの費用（Cost per Unit of Iroduction）は19類型のうち6類型において1952年を上廻つた。西部ウイスコンシン酪農農場を除くと，1953年にはあらゆる農場の生産単位当りの費用が1947～49年のそれを上廻つた。生産単位当り費用の変化は，主として，産出高の変化と生産用諸品目の支払価格の変化に依存するが，テキサス高原においては，1953年の生産量が減退したにもかかわず，生産用品目に対する支払価格は1947～49年を著しく上廻つため生産単位当りの費用は最高であつた。西部ウイスコンシン酪農々場における1953年の農業純生産は1947～49年の平均を凡そ20%凌駕したにもかかわらず生産用諸品目の支払価格は僅か5%上昇したに過ぎなかつた。

ここで用いる総経営費(total operating exp-enses)は生産に消費された一切の現金支出を含むとともに，機械，施設及び建物の資産上の

変化に応じて調整された。粗所得1ドル当りの経営費とは現実に受けとつた粗所得のうちのどの位の部分が経営費の支払に参加するかを示すものである。永年にわたつて検討するならば，それは価格変動に対する農業者の脆弱性についてある種の示唆を与える。多額の負債を持たぬ農業者や経営費の節減を実現している農業者は不利な価格変動による打撃を打ち消し得る比較的好ましい位置にいるのである。

1950年から53年にかけての粗所得1ドル当りの経営費はここで研究された諸類型の11類型において1937年から41年にかけてのそれよりも少なかつた。大部分の農場では粗所得の約50%が経営費として支払われる。

資本に対する利子と，経営主とその家族の労働報酬を含む農業生産費の総計を1952年と比較すると，1953年においては，19の農場類型のうち11類型で多く，8類型において少なかつた。しかしこれらの全農場における1953年の総結合費用（Total comlined Cost）を1952年のそれに比べると1%弱少なかつた。農業生産費の総計が減少したのは，家畜に投資された資本がより低く見積られたことにも原因した。すなわち，家畜頭数は増加したが1頭当りの価額は可成り下落した。

国全体としてみると，1953年において農業生産に用いられた費用は1952年より約4%少なかつた。19の農場類型についてみると1953年の経営費は1952年のそれを約2%下廻つた。この開きは農場数が減少しているにもかかわらず，個々の農場がより広い面積を耕作したことにもいくらか原因するものである，その結果，個別農場の経営費（Cost of operatiug individual farm）は，国内のあらゆる農業者の生産費用（Production espenses）が減少して，生産単位当りの経営費が減少した時にも増加したのである。

訳註　本節ではFarm Production expenses, cost of operating individual farms等の用語が出てくるがこれらは全くoperating eapenses またはfarm expenses と同じ意味に，すなわち「経営費」の意味に用いられている。

農業生産費の総計と農業経営費に影響を及ぼす投入品目（Input items）は「農業生産費事情」（The Farm Cost Situation）に詳細に示されている。1952年から53年にかけてこれらの諸品目が減少したのは，主として飼料，種子，及び家畜の価格が下落したことに原因する。農業者の多くが直接，間接に他の農業者から購入する以上の諸品目の価格は下落したが，農場で生産できない大部分の購入生産用品目の価格は1953年には1952年より若干上昇した。投入単位当りの生産は農業経営能率(Efficiency of Farming operateon）の変化を知る上の手がかりとなる。ここで云う農業経営能率とは，1947～49年の価格で計算せる農業純生産を同年の価格で計算せる総農業生産費と対比して算出したものであつて，農産物の生産に用いられる生産要素のそれぞれの単位に対する産出量の変化を測定する場合に利用されるものである。

1950～53年を1930～33年に比較すると北部大平原の小麦～小穀粒～家畜農場における投入単位当り生産の増加が最大であつて，これらの農業では他の農場類型よりも1930～33年に較べて1950～53年の経営能率は高かつたが，このことはその地域における1950～53年の天候が1930～33年よりも比較的良好であつたことを念頭に置いて考えられなければならない。

経営能率は大部分の農場類型において増加したが1～2の類型では減退した。テキサスの黒土草原地域の棉作農場は最大の減少を示したが，これは1930～33年に比較して棉の面積が可成り増加し，かつより集約的でない諸作物が最近になつて棉と交替したためである。これらの農場における1930～33年と1950～53年の作物収量指数（Crop yield index）は，平均すると同じであつた。

一般的にいえば，玉蜀黍と小穀粒作物とが重要な経営部門をなす農場は家畜や棉が重要である農場よりも能率が高い。例外が生ずるのは主としてそれらの地方（Local areas）の天候のためである。機械化は家畜農場におけるよりも穀作農場でより広汎に採用されて来たが，機械化は農業者が経営規模の拡大や適期作業の遂行，従つて農場及び一人当りの総産出高の増加を図

ることを可能にした，又種子の品種改良と肥料の施用量の増加は恐らく家畜農農業者よりも作物農業者（Crop farmer）により大きな恩恵を与えて来たものと思われる。

二　1953における農場類型別経営成果

酪農々場

1953年の農業純所得を1952年と対比すると中央北東部の専問的酪農々場では約16%，東部ウイスコンシンの酪農々場では約17%，西部ウイスコンシンの酪農々場（Specialized dairy farms）では約19%減少した。農業資本の見積り利子を差し引くと，経営主とその家族の労働に対する収益は中央北東部の49セントが最も少なく，東部ウイスコンシンの59セントが最も多かつた。

価格の変価はこれらの酪農家の所得を減少せしめた最大の原因であつたように思われる。販売された生産物の受取価格は，生産用諸物品及び諸用役の支払価格が4%の下落に過ぎなかつたのに対して，約14%も下落した。1953年における純生産は，平均すると，1947～49年におけるよりも17%多かつた。すなわち，3類型の酪農農場では全て純生産が過去の記録を上廻つた。これらの3類型の酪農農場におけるここ4カ年平均の作物収量は1947～49年の収量を凌駕した。1951～53年の作物収量は平均すると1947～49年の収量より約18%高か増つた。牧草産出高も恐らくこれと同程度に増加したように思われる。

購入肥料の使用量の増加は，栽培条件に恵まれたことと相俟つて，酪農家により多くの乳牛の飼養とより多くの濃厚飼料の給飼を可能としたところの，飼料生産の増加に著しく貢献したのである。牛乳生産の増加はそのまま放置されるならば，もつと著しく酪農所得を減少せしめたのであろうが商品信用公社(Commodity Credit corporatian）が莫大な量のバター，チーズ，その他の乳製品を購入して，それらの諸製品の支持価格以下に下落するのを防止したため，漸く，そのような事態に直面することを避けた。情勢は乳製品の資本消費当りの一層の減少によつて悪化した。

酪農部門からの収益は肉牛や豚の如き競合的経営部門以下であるにもかかわらず，牛乳生産はここ数年来増加を続けている。酪農家はいままでよりも多くの若牝牛を飼育し，かつ普通よりも老牛を長期間飼養することによつて，余分の採草地と乾燥飼料（Drag roughage）を利用するようになつた。しかし，これは最近では明かにやりすぎられている傾向がある。玉蜀黍の栽培面積を拡大して，より多くの豚を飼養する農業者は，酪農部門を拡大した農業者よりも多くの金を儲けた。

玉蜀黍地帯の農場

玉蜀黍地帯における4農場類型の1953年の農業純所得は全て前年度のそれを下廻り，豚～酪農，豚～肉牛育成，豚～肉牛肥育，換金穀作農場にあつてそれぞれ5%，26%，21%，17%低かつた。これらの4農場類型では全て1952年から53年にかけて生産は減退し，豚～酪農農場を除くと，他の3農場類型における受取価格も下落した。

玉蜀黍地帯に位置する農場の1953年の作物収量は1952年のそれを下廻つた。減少の割合は換金穀作農場の4%が最少で，豚～肉牛，育成農場の21%が最大であつた。1953年の収量は豚～肉牛育成地域では1947～49年平均を下廻つたが，それ以外の地域では多かつた。

1953年に玉蜀黍地帯の農業者が生産用品目に支払つた価格は，平均すると，一般に1947～49年を上廻つた。それらの価格騰貴は豚～肉牛肥育農場の2%が最少で，換金穀作農場の20%高が最大であつた。肥育用牛の支払価格指数（Index of price paid by cattle feeders）に影響を与える。1953年における肥育用牛の支払価格を1952年と対比すると約19%安であり，1947～49年と対比すると約17%安であつた。

玉蜀黍地帯の農場は世界で最も農業機械化が進んでいる。これらの農場の機械の多くは機械の価格が可成り廉く，かつ生産物の受取価格が現在よりも相当高かつた時に，購入された。玉蜀黍地帯の農業者は，価格関係が改善されなければ，現在の機械資産（Inventories of machinary）を維持できないであろう。しかし，農場によつては機械資産が可成り減少しても，生産能率に重大な影響を与えずにすむ農場もあるように思われる。

畜牛部門をもつところの玉蜀黍地帯の農場類型は全て，1952年から53年にかけて生じた旱魃によつて，直接，間接に酷い影響を受けた。大部分の家畜飼養地域（Livestock areas）においては，例年より多くの頭類を可成り廉価で販売しなければならなかつた。廃乳牛（Discarded dairy cow）の受取価格は良質の牛（Betterg rade of cattle）の受取価格以下であつた。

1952年と53年の両年の換金穀作農場における経営主とその家族の労働時間当りの収益は玉蜀黍地帯のなかで最も多かつた。しかしながら，経営主とその家族の年間労働総収益は1952年においては第2位であり，1953年においては第3位であつた。1953年においては豚～肉牛肥育農場の年間収益が最も多く，豚～酪農農場が第2位であつた。

（註）残りの農場類型についての検討の部分は紙面の関係で割愛した。

第15回　北海道農業經済学会報告要旨　（その二）

獨逸の貴族主義

渡　辺　侃

ワルター・ゲーアリツツの著書，ユンケア，貴族農業者，(Walter Gorlitz：Die Junker, Adelu, Bauer 1957）は，独逸の国状と心情の内に根を張つている貴族主義の歴史と伝統を書いた，興味あるものだ。ユンケアはユング・ヘアすなわち若殿の意味で，独逸の帝王からその東北(エルベ河以東)に封地を与えられ，農場経営をし，政界や軍隊に出た貴族階級である。その農場は大きく，其の経営は，農産製造（馬鈴薯火酒醸造・甜菜製糖等）と結びつけ，合理化の途を進んだ。農学を基礎つけた人々，テーア，フオン・チユーネン，フオン・リビツヒ，フオン・デア・ゴルツ等も此の階級の人々である。フアン・デア・ゴルツの家名は実に13世紀に遡るもので，其家系から将軍・政治家・財政家・外交官の著名の人々が出ている。貴族の下に騎士リツテアがつきその下に原住のスラブ族や内国植民で入れたゲルマン族の労働者がついて大農が成立した。その状態は小農経営なラインランド，ホランド（和蘭），ダンマルク（丁抹）より更にフランスの状態と異つている。

プロシアが独逸を統一したのはこれら貴族及び従士の力であつて，フランスを征伐したが，第1及び第2の世界大戦で先ず英国，さらに米国また露西亜から抵抗された。ヒツトラーは貴族でなかつたが，血統的貴族主義であつた。それが倒されても，今日なお貴族的な心情が絶えてはいない。

それがよいか悪いかの批判をするのではない，報告者は英国の中産階級Roy Lewis & Angus Moude; Englliish Middle Classes (1959)を講読したことがある。その本を評してスノブ（Snob, 貴族になりたがる人）がスノブのことを書いた，スノブのための書だとしたものがある。スノブの反対にスプロル（Sprol, 無産者になりたい人）が今の日本には多いようだ。